●ひとかたる ものがたり●　第1回

# 大久保金一さん（小宮）

大久保さんは、四季折々に花に囲まれる「マキバノハナゾノ」をつくろうと、震災前から、農業を営むかたわら自宅周辺に花を植え続けています。

震災の年は、草刈りのため、仮設住宅から1日おきに自宅に通っていた。高齢の母がいて、通うのは一苦労だったが、自宅の部屋で寝転ぶのは気持ちがよかった。雨どいを外し、屋根や壁を拭き、測って確かめながら、自宅周りの線量を下げた。軒下の土も削ってきれいな土で覆い、翌年、もう一度削った。

その頃、村内の線量を測っていた菅野宗夫さん（佐須）が、東京大学の溝口勝先生とやって来て、その米づくりの実証に、思いがけず参加することになった。水田を3つに区切って、代掻きや水の流し方を変えながら行う米づくりの実証だった。沈んだ泥や地下水への影響も測定した。

周りの人から「いくらもらっているんだい」と聞かれたりもした。そんなつもりは全くなかった。宗夫さんに話すと、「そういう人の気持ちも、理解することが大事だよ」と言われた。…そうだなぁ、と思った。

それから俺はいろいろ考えて、「東大の先生が、こんな田舎に来ることはない。このできごとを何かに残したい」と考えるようになった。

稲刈りの時に、その考えを話した。「桜の苗を植えたい」と。「先生方に負担をかけては意味がないので、自分にやらせてほしい。興味があれば苗を植える時だけ協力ください」。花づくりを通して知り合った全国の友達も協力してくれて、その参加者は120人になった。

母は実証への協力にずっと反発していた。「誰もやったことのないことをやるなんて」。穂ばらみ期になると「とれるものか」と言った。それでいながら田植えの時には「かっこよくしたか」と気にした。

つらかったのは、収穫した米を捨てさせられたことだ。顔で笑って、心で泣いた。それでも、続けた。

一昨年、母が亡くなった。大学の先生や新聞記者、何人もの人が、母のために足を運んでくれた。ありがたく、また誇りにも思えた。

母も、分かってくれただろうか。

「マキバノハナゾノ」をつくろうと、ずっと夢見てきた。2年前からは、東京大学の学生たちが、手伝ってくれた。バラを植えてみたいという学生がいたので「飯舘花壇」（詳しくはP25）には、たくさんの種類のバラを植えてみた。

いろいろな人が花を見に来て、声をかけてくれるようにもなった。今は福寿草。これから、水仙、モクレン、水芭蕉と、開花が続く。花園づくりの夢を、俺はこれからも見続けようと思う。

「広報いいたて 平成29年4月号」より抜粋
http://www.vill.iitate.fukushima.jp/site/kouhou/1459.html

# いいはなプロジェクト

3/19

各行政区に５本のバラを植え、通路は石で飾りました

東京大学の大学院生らで活動する「いいはなプロジェクト」は、大久保金一さん（小宮）が自宅周辺で取り組む花園づくりに協力しています。メンバーの就職などで活動が最終盤を迎える中、34人が現地を訪れ、2日間をかけて、約4アールの農地に村の形の花壇を完成させました。花壇は水仙で縁取り、電飾の小花で20行政区を描き、バラ約１００本を移植しました。

前月につけた裏山の階段。登ると花壇が見渡せます